

通信小海

イラク破壊の責任

牧師 水草修治

「イラクは内戦の様相を呈しており、米英軍は撤退を余儀なくさせられそうである。西部と、南部の多くの都市で、すでに米軍は地元ゲリラを一掃することに失敗した。米軍は、かわりにゲリラに対抗するイラク正規軍を育成する戦略をとってきたが、イラク正規軍は人気も士気も低い。米軍がイラク人に嫌われているからである。正規軍はゲリラにまったく勝てない状態である。おそらく米英軍は、ベトナム戦争以上に不名誉な負け方をする可能性が高い。」国際情勢の鋭い分析で知られる田中宇氏は「こいつこいつ趣旨の解説している。米英は近々、自国の都合で立てた傀儡

「今月の御言葉」

「自分の敵を愛し、
迫害する者のために祈りなさい。」

マタイ福音書五章四十四節

政権を守りきれずに撤退するらしい。

開戦時、米政府はイラク戦争には二つの大義があると宣伝した。大量破壊兵器の存在と、フセイン政権がテロ組織を支援しているということである。しかし、このほど米国防務省はこの二つはいずれもガセネタであったと最終報告した。結局、イラク戦争とは、米政権のスポンサーである石油・軍事関連産業の金儲けを目的としたお決まりの侵略戦争だったのである。

そういえば今年ガセネタを掴まされて大騒ぎして、与党から非難を浴びてその職をやめた国会議員がいた。不思議なのは、ブッシュにガセネタを掴まされて、憲法を踏み違えて自衛隊を世界が非難する侵略戦争に加担させ、米軍に莫大な軍資金を提供した人なんのお咎めもなかったことである。しかも今なお、海上自衛隊・航空自衛隊は米英軍の武器弾薬運搬をして戦争を手伝っている。

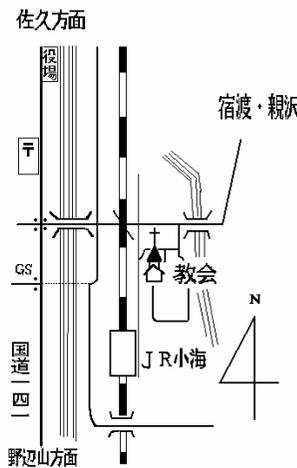
日本同盟基督教団小海キリスト教会 牧師 水草修治

会堂・牧師館 南佐久郡小海町大字小海四三三五 二七

〒三八四一一二 二六七九二四七七六

カンパ宛先 振替 005300 61683

見晴台の教会へどうぞ



集会あんない

日曜日 サンデースクール 午前八時四五分

朝礼拝 午前十時から十一時半

夕礼拝 午後八時から九時

水曜日 祈り会 午前十時半と午後七時半

*海尻・川上で毎月家庭集会あり。

*個人的な聖書勉強や個人的なご相談にも乗ります。

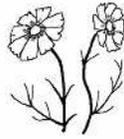
これは他人事ではない。日本政府は私たち国民の代表だからである。イラクにおける同盟軍の死者は、九月二十七日発表で二千九百三十九名である。The Lancet の精細な研究によれば、イラク民間人の死者数は、およそその百倍というから三十万人。奪われたイラクの人命の責任の何分の一かは、いち早くブッシュの戦争を支持すると表明した我が国政府にもあり、そんな愚かな政府を支持した日本国民にも確かにあるのである。

いったい、私たちは失われたイラク三十万人の生命、遺族の悲しみ、破壊し尽くしたイラク国土に関して、どのようにお詫びをし、その償いをする事ができるのだろうか。それこそ新内閣の最優先の外交課題ではなかるうか。

ところが新内閣は、性懲りもなく、さらに日本軍が、武力行使をもって米軍の戦争の手伝いのできるように、まず解釈改憲をし、次に新憲法を制定しようとしている。そして喜び勇んで戦争に行く日本人を養成するために、教育基本法を変えることを最優先課題とするそうである。

「悪いことをしたら謝りなさい」と私たちは子どもに教える。「たとえ過失であつても、迷惑をかけたのだからお詫びをし、弁償しなさい」と教える。国になると、そういう当たり前のことをしなくてよいのか？ それどころか、開き直つて、さらに悪事に加担する準備をするという。このままでは、早晚この国に歴史の審判者である神のさばきを招くことになるであらう。

主は言われた。「剣を取るものは剣によって滅びる。」平和を作り出すものは、赦しとへりくだつた心による悔い改めしかない。



海尻井出博彦さんち で家庭集会

十月五日(木)、二十六日(木)夜七時半から九時、聖書を読む会をしています。ご一報くださつてお越しく下さい。 **96 2534**

南相木でも家庭集会

* 十二日(木)夜七時半から九時

* 日向中島悦子さん宅です。

* 家庭集会には牧師夫婦がかけ、聖書を読んだり賛美歌を歌つたりします。どなたでも気軽にどうぞ。

お米をください

信州から野宿者支援

備蓄していた米が、そろそろ底をつきそつになつてきました。炊き出しが続けられるように、お米を提供してください。よろしくお願ひします。

山谷農場事務局(藤田 寛) 小海町芦谷
ヒルサイドコーポ一 二号室毎週金曜・土曜は
あります。電話090・1436・6334

〒270-0422・7866・2008

メール nyoro@beige.ocn.ne.jp

カンパニ振替 一四 四五三七九六

「絵本の紹介」

ちいさなリース



むかし、ある国にとてもおそろしい将軍がいました。その人の名前は、カロールといいました。

「おれは世界で一番えらいんだ！おれのいうことをきかないやつはれだ！」と、いつも大きな声でどなりちらしていました。

カロール将軍は、自分の気に食わない人をさがし出しては、るうやに投げこんでしまつのです。今日も、たくさんの人がつれていきました。

「おい、おまえたち！この国で一番えらいのはだれだ？」

「それはカロールさまです。」

「おい、おまえたち！世界で一番えらいのはだれだ？」

「それも、カロールさまです。」

兵隊たちは、カロール将軍のいうことは、

どんなことでもしたがいきました。でも本当はみんなカロール将軍のことが大きらいでした。ある日のことです。カロール将軍が家に帰ると、家の門に小さな花のリースがかざつてありました。こんなことははじめてです。カロール将軍はびつくりして、「だれだ！おれんちの門に花なんかおいていくやつは！」とあらしく花を地面にたたきつけ、足でふんづけました。

「どうせ、だれかの家とまちがえたんだろう。チエツ！」

ところが、次の日も、また次の日も、毎日、カロール将軍の家の門には、美しい花のリースがかざつてありました。

「ウーム、いったいどのどいつだろう、おれんちの門に花をおいていくやつは・・・」カロール将軍は、不思議でたまりませんでした。自分に花をプレゼントしてくれる人など、いるはずがないと思つていたからです。でも、カロール将軍は、本当はうれしくてたまりませんでした。

「よし、今日こそ、だれが花を持つてくるかつきとめてやるぞ。」カロール将軍が、隠れてこっそり見ていると、小さな女の子が

向こうからやつてきました。

「おい！そこで何をしている。おまえだな、いつもいつもおれんちの門に花をおくやつは。何でそんなことをするんだ。子どものくせに、なまいきなやつだ。」カロール将軍は大きな声でどなりました。

すると女の子はペンダントを開き、カロール将軍に見せて、こつ言いました。

「わたしのパパとママは、あなたにつかまつてるうやに入られれました。そして、そこで死んでしまつたんです。わたしはずつとあなたのことが大きらいでした。でも ある日、パパとママがいつも言つていたことを思い出したんです。『あなたの敵を愛しなさい』つて……。」

「ええつ？あなたの敵を愛しなさい？」カロール将軍はびつくりしました。

「だからね。いじめられても、ゆるしてあげよう。やさしくしてあげようつて思つたの。」

「そ、そ、それでおまえ、おれに花を……」女の子は小さくうなずきました。

「でももう、あなたは敵じゃないわ。こつしてお話できたんですもの。わたしたちはお友だちよね。」女の子はこつこつ笑つて帰つて

いきました。

「うおおん、うおおん、うおおん、うおおん、うおおん。」カロール將軍は家に入ると、泣きさげびました。

「おれはなんて悪い人間だったんだ。ごめんなさい。ごめんなさい。おれは、いつたいうしたらいいんだ。」涙が、あとからあとからどんどんこぼれてきます。

そしてカロール將軍は、「おれは今までみんなを苦しめてきた。これからは人をしあわせにするために生きよう。やさしい人間になる。」と決心しました。

その夜、カロール將軍はとつてもしあわせな気分でした。そして、ひさしぶりにぐっすり眠りました。

それからまもなく、カロール將軍は、みんなから「カロールさん」としたわれるようになり、この国は、とても平和でしあわせな国になったということです。



右の『ちいさなリース』というお話は、さかもとふあみさんの絵本の本文です。小海の教会に見えている一人の御婦人にお借りして一読。胸を打たれました。

これは二十年程前の恐ろしい独裁政権下のルーマニアでの実話に基づくお話です。冷酷な役人が、国家の非道な思想統制にしたがわない良心的な人々を次々に捕らえて、拷問・処刑を繰り返しました。しかし、ひとりの少女の一言が、彼の凍りついた心を溶かしてしまいました。「あなたの敵を愛しなさい。」という一言が……。

独裁政権下のルーマニアで非道な思想統制・弾圧が行なわれていることは、私が神学生時代、一九八〇年代に知らされてきました。思想改造のための強制収容所、拷問の実態がどのようなものかというレポートを読んで、これが今現在の現実か、と驚きと憤りを禁じえなかったことを記憶しています。当時、ソ連、ルーマニア、東ドイツなどでは西側のテレビやラジオを聞くことも許されず、読む本も厳しく統制されていたのです。

そんな状況で、聖書を読むこともまた制限されていました。わが国の国会図書館にも

刻まれている「真理はあなたがたを自由にします。」という主イエスのことばを、独裁者が恐れたからでしょう。

当時、先輩の中にこうした弾圧下の東欧への福音宣教のために、神学生時代から具体的に活動している人がいました。大きな体をした、たいへん祈り深い人でした。その先輩は言いました。「でも、ソ連はまもなく崩壊するでしょう。もうあの国は内部からガタガタになっています。」

でも、その言葉を聞いたとき、無知な私には、まさか米国に対峙する、あの巨大な帝国が崩壊するなどとは思えませんでした。いや私だけでなく、当時の世界中の専門家の中でソ連崩壊を予知していた人はほんのわずかだったようです。

それはそうとして、あのような凍てついた恐怖の時代に、『ちいさなリース』に描かれたような愛の奇跡があったと知ったのは、今回がはじめて。神のことばの力とそれに素直にしたがうことの大切さを知りました。

「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。」マタイ福音書五章四十四節